

## 能楽

高橋義雄さん(四三)

釧路市南大通三

高橋秀一さん(四〇)

釧路市共栄大通五



「伝承していく重い責任を感じる」と高橋義雄さん(右)と高橋秀一さん

### 釧路宝生会をリードする二人

能楽の釧路宝生会をリードするこの二人。高橋義雄氏は父の義平氏(セシ)が経営する山一高橋製麺所―釧路

市南大通三の専務として。また、高橋秀一氏も共栄高橋製麺所―同共栄大通五の社長として、共に家業の製麺業に励みつつ、日本の古典芸能にひたすら打ち込んできた。従兄弟同士の受賞だ。

「職業でもないのに祖父の代から我われ孫の代と、本

とても非常に幸福な事でした」と義雄さんはかみしめる。

### 野村蘭作氏らに師事

二人とも宝生流能楽師の野村蘭作、当山興道氏などに師事して小鼓や笛などでひとときわ修練を積み、昭和

芸術と言う。「舞台での動きや謡など一時間ほどの手を全部丸暗記する。楽譜を持つて舞台の上に出るのは一切まかりならぬですから、これは大変でした。おかげで囃子(はやし)に関しては、道内でも引けを取らない域を目指せるかと思う」。

活動の拠点は釧路だが、

ので、この差は歴然と大きい。ただ素人とは言え、そのどん尻に少しでも迫らなければと願っている」と義雄さん。

その上で、古典芸能の世界をどれだけ正しく身につけていけるか。北辺の地・釧路での能だからという甘い芸が、中央の舞台では通

# 古典芸能の神髄めざす

## 修練に励む二人、伝承に力

当に好きでやり続けてきた事を、このように評価してもらえるのは本当にうれしい」と二人は口をそろえる。

義雄さんはこの道三十三年、秀一さんは約二十年。

「私は同志社大学時代の京都で、秀一は成城大学時代の東京で、短いとはいえきちんとした物を集中的に学ぶことが出来たのは、今思

五十二年秋に帰釧し翌年から新春能もスタートする。釧路の能楽史上、記念すべき日でもあるが、秀一さんは「師匠にも、宝生会などいろいろ盛り立ててくれる人にも恵まれた。ただ釧路へ帰って来てから資料に乏しいので大変でした」と回想する。

秀一さんは、能は暗記の

札幌、東京、京都など道内外の舞台にも請われると積極的に出演する。二十八日には帯広市での市民能にも協力する。このほか、鼓や笛の会に参加して研鑽を積むことも欠かせない。「こうして玄人の芸に触れてくる。我われ二人はどちらかと言えばアマチュア。プロ

野球とアマ野球みたいなも

じない。芸の道の厳しさは中央で痛切なほどこれまた身にしみ込ませている。義雄さんは「我われの世界、延々と伝えられてきたものを正しく学び、さらにこれから稽古していく方のごよう伝承していくかです」とその重い責任も、改めてかみしめている。

場